

成蹊学園の 新たな創造に向けて

専務理事あいさつ

この武蔵野の成蹊学園のキャンパスは、皆さんが心新たに新学期を迎える今、満開の桜と櫻並木から萌え出る新緑で一番美しい季節となります。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。皆さんは、新たに一步を踏み出す学園に対して、大きな期待をされているものと思います。また、既に在学をされている皆さんも、新入生の皆さんと同様に新学期を迎えて心ときめくものを感じていることでしょうか。各学校の教職員の協力を得ながら、皆さんの期待に応え満足していただけるように、教育環境を整えることが私の責務であると考えています。

小学校はこの春、トンネル山の仮校舎で新学期を迎えますが、今年七月には現在建設中の新校舎が竣工する予定であり、九月から始まる二期からは新しい校舎で勉強をする事となります。すでに、一年生から三年生までは一学級二十八人一学年四学級編成、四年生は一学級二十八人一学年四学級編成に十六人一学級の国際学級が加わり、五年生と六年

生は国際学級の児童が混入した一学級三十二人編成の四学級編成の授業が受けられる体制にありますが、この少人数教育の実をあげるのに適した新しい校舎で学ぶこととなります。小学生の皆さん、楽しみにしていてください。現在、高等学校の生徒の皆さんは昨年七月に竣工した中学校のホームルーム棟で教育を受けていますが、新しいホームルーム棟が今年の十二月上旬には竣工の予定です。十二月中に必要な環境を整え来年一月の三期からは、中学生も高校生もそれぞれ新しいホームルーム棟で勉強をすることになります。二つのホームルーム棟の間には中央館があります。二つの中央館を要として中学校と高等学校はこれまで以上に一貫性を強めた教育を実施することになります。

大学における新しい教育に対する展開は、二〇一〇年度から始める成蹊教養カリキュラムに対する取り組みです。これは、その理念に「個性の尊重と人格の陶冶」と「自力教育の礎を築く」ことをあげ、学部によらずすべての学生が一定の水準まで修得していくことが望ましいと考えられる内容を、共通のカリキュラムのもとで学ぶ新しい教育プログラムとなります。その中には、成蹊教育の特色として桃李成蹊科目と題する科目も準備されており、成蹊学園の建学の理念につながる科目と創立者の中村春二先生の思想から派生する内容を学ぶこととなります。この成蹊教養カリキュラムは、リベラルアーツそのものです。

この中で、国際性を育む教育の柱は英語教育と位置づけ、実践的なカリキュラムのもとで国際性を養うこととなります。今年度と来年

度は、この科目群設定の準備期間として、将来の万全を期して二〇一〇年度からのスタートに備えるつもりです。学園全体としては、今年十月を目標として環境保全の国際的な基準として定められているISO14001の認証取得をめざし、学園環境委員会を設置し取り組みを始めています。この活動は、キャンパス内の将来に向けた環境保護活動としても意味のあることです。が、教育法人として成蹊学園の児童・生徒・学生を対象とした環境保全に向けた教育プログラムの活性化と、教員の環境関連の研究的な取り組みにも目を向けるものとなります。ぜひ、皆さまのご協力をいただきたいと思います。

成蹊学園は二〇一二年に創立一〇〇周年を迎えますが、現在二〇一二年に向けて学園創立一〇〇周年記念事業を展開しており、教育の充実とその具現化に必要な施設建設に取り組んでおります。この実現に必要な資金総額は約百六十億円ですが、そのうちの五十億円を募金事業で賄う計画で皆さまにご協力をお願いしております。現在期半ばを過ぎた時点で、約五〇%の募金達成率となっております。昨年度から、これまでご協力をいただいた募金を、各募金事業に資金・基金として割付け有効に使わせていただいておりますが、今後とも皆さまの温かいご支援とご協力を賜りたくお願いを申し上げます。

期待に応える教育環境の実現と さらなる教育の充実をめざして

成蹊学園 専務理事
成蹊学園 将来構想検討委員会委員長

橋本 竹夫 Takeo Hashimoto



新年度を 迎えて

学長・校長あいさつ

今

年も多くの優秀な新入生を迎えることができました。皆さまが緑豊かで知的な刺激に満ちたこのキャンパスで大きく飛躍することを期待しています。

ご存じのように一八歳人口は減り続け、一九九二年に比べて約六〇%にまで落ちていますが、四年制私立大学の数は約四五%増えました。その結果、二〇〇七年度の入試では四割を超える私立大学が定員割れをおこしました。大学間競争はますます激しくなっており、本学でもいろいろな取り組みをしております。新年度にあたり、近況をご報告いたします。

入学試験

伸びる資質をもった学生を受け入れるために全学部統一入試を新たに導入し、同一日程で池袋キャンシティと本学を会場として実施しました。本学独自の二教科型で、入学後の勉学の基礎として欠かすことのできない教科にしばって時間をかけて理解を深く問う「基礎学力重視の入試」です。一回の受験で複数学部(文系三学部)に出願できることも特徴になっています。多くの志願者がありましたので、今後この入試によって潜在能力を見極めたいと考えております。

他の入試経路もあわせた志願者総数は前年が約一五%上回り、レベルの高い学生を確保することができました。学部別では文学部と理工学部の志願者増が目立ち、経済学部、法学部はほぼ昨年なみでした。

成蹊教養カリキュラム

大きな社会変動が地球規模で進んでいます、

とくに、知識基盤型社会への転換は急速であり、新たな知を創造し活用することが社会を發展させる鍵となっています。このように変動し続ける社会にあつては、創造性・豊かな知性ととも、いかなる変化にも対応できる能力を培うことが大学教育の課題です。

成蹊で教育を受け、卒業するからには一定水準以上の力を保証することが私の願いです。教養、基礎学力を十分に身につけてこそ専門的知識も生きてくると信じていますので、充実した教養教育は重要な課題です。

新しい教育プログラムとして、ワンキャンパスの総合大学である利点をフルに生かした「成蹊教養カリキュラム」を編成しつつあります。このプログラムは学部横断的に実施するものであり、これまで専門科目を担当していた教員も積極的に関与し、文理融合教育と英語教育の徹底をめざします。文系・理系を問わずすべての学生にとって魅力あふれるものになるはずで、桃李成蹊科目、日本語科目、キャリア科目なども含み、成蹊だからこそできる教育を二〇一〇年度に開始する予定です。

社会活動支援奨学金

学園創立一〇〇周年記念事業の一つとして新たに設定した「成蹊大学社会活動支援奨学金」は、教員との連携のもとに学生が行う社会貢献活動や調査研究活動を支援することを目的としています。学生と教員の距離が近い本学だからこそ可能になったものであり、学生の総合的な力を向上させるための奨学金です。昨年度が第一回の支給でしたが、「スリランカプロジェクト二〇〇七」「フェアトレード普及活動」

「Vege Run」の規格外有機野菜又は減農薬野菜の普及活動」が選ばれ、多くの成果を上げました。学生が社会に目を向けて活動する契機になっていますし、他の学生にも良い刺激を与えています。

学生との対話

大学の改革には学生の意見が生かされる必要があります。意見箱「学長直行便」はすでに定着し、重要な役割を果たしています。ユニークな試みとして、朝日新聞の紙面でも紹介されました。

また、意見を直接聞くために「学長オフィスアワー」も開いています。学長室のドアを開放しておき、予約なしで気軽に来られるようにしています。話の内容は、建設的な意見から陳情・苦情、世間話までさまざまです。

さらに、昨年度からはテーマを決めて意見交換するための場として「学長と語る会」を設けました。これは学生との昼食会であり、今後多くの学生と話をしたいと思っています。

大学の淘汰が始まっているなかで、成蹊というブランド力をさらに確かなものにする必要があります。大学に求められているのは何よりも高い教育力であると思っておりますので、さらに力を尽くす所存です。今後ともご理解、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



成蹊ブランドの維持と 教育の質向上に向けて

成蹊大学長

栗田 恵輔 Keisuke Kurita



四度目の建学の時を迎えて



成蹊中学・高等学校長

谷 正紀 Masanori Tani

成蹊の春、新入生を迎える季節となりました。入学された皆さんは厳しい選抜にもかかわらず難関を突破され、今後の学校生活での活躍を大いに期待しております。

中学校の入試では、昨年の四科目入試への統一に続き、今年度は入試を二回にしました。二回合わせて応募者数は昨年度の二・二倍と大幅に増え、受験生も七〇%以上増加し、受験生のレベルも高くなっています。これらは同窓生ならびに在校生保護者の皆さまのご支援の賜と感謝いたしております。

高校生の大学進学については、進路が多様化するなかで今年度の成蹊大学への推薦入学は百十九名で、卒業生の三七%となりました。外部の大学については、生徒の多様な個性を生かし国公立大学、難関私立大学さらには成蹊の伝統である医歯薬系大学など、さまざまな分野へ挑戦し進学しています。今年度から、一定の条件を満たす生徒について成蹊大学推薦資格を留保したまま外部大学受験できるよう成蹊大学と推薦協定を見直し、十八名がこの制度を活用しました。これにより生徒の挑戦精神の昂揚と、多くの優秀な生徒の成蹊大学への進学とが両立できることを期待しています。

さて、成蹊学園の長い歴史で、学園創立二〇〇周年は四度目の建学の時といえるのではと感じております。最初は一九三三年の中村春二先生による成蹊学園のまさしく創立の時です。次はキャンパスの吉祥寺移転と旧制七年制高等学校開設の時です。三度目は戦後の新制中学校、新制高等学校、および成蹊大学の開設の時です。そして四度目は創立二〇〇周年を迎える今日といえます。三度目の時期から数えてこの春の入学式は、

中学校では六十二回目、高等学校では六十一回目となり、ともに六十余年の歳月が流れていきます。創立二〇〇周年に向け中村春二先生の建学の理念を未来に生かすため、中学・高等学校では「グローバルに認知される教養と個性の育成」、「協調性のある自立精神と自律的行動力の育成」、「知的好奇心と科学的探究心の育成」を教育のビジョンとして掲げ、その実現に向け「貫教育、全人教育、個性伸張教育を三本の柱として、教育の中身の充実、教育の枠組みの改革、ならびに教育環境の充実に取り組んでおります。

教育の中心については中等教育の役割として「生徒個人が多様な個性を生かし、志望するいかなる進路も目指せる力」をつける教育や指導ということとなります。とくに学習習慣の定着、将来への動機付けなどによるモチベーションの向上、学習意欲の向上、学力の向上、将来を見据えた挑戦意識の向上が重点と考えています。各教科では導入、充実、発展期の各ステップにおいて生徒の成長目標、期待される獲得能力目標を明確にし、六年間の「貫したカリキュラムの充実により、学習意欲と学力のさらなる向上を図ることが求められます。モチベーションの向上、将来を見据えた挑戦意識の向上については、自ら才能、個性を考えさせ、将来像を描かせ、そこへ至るための道筋を考えさせる「六年間の進路指導」を、まず高校一、二年生を対象にスタートしました。最近、外部大学進学で推薦が多くなり安全志向になっていることが若干気になります

が、キャリア意識醸成教育と指導の充実により、自ら将来像を描き、それに向けて挑戦する姿勢が一層高まることを期待します。国際理解教育はケンブリッジ大学への短期留学、

オーストラリアのカウラ高校へのショートステイはじめ、国際交流面でも韓国、中国など多様な成果が出ました。今年も活発な活動を期待いたします。

教育の枠組みについては、昨年度にクラス定員とクラス数見直しによる中学校での少人数クラス化、国際学級の位置付けの改革を行い、順調に立ち上げることができました。また、今年度から中学二年次以降の帰国生対象の特設英語教育プログラムも立ち上げます。

入試改革はモチベーションの高い生徒の獲得のため、塾、専門誌、入試相談会、学校説明会などの場で精力的な広報活動をしてきました。前述の中学校の二回入試化に伴う応募者、受験生の増加、偏差値の向上はその成果でもあり、さらに次年度の入試諸活動に生かしていきたいと考えています。

教育のさらなる充実のためには教育環境の整備が必要で、その第二弾として昨年夏に中学校新校舎が完成しました。引き続き高等学校の新校舎建築に着手し、本年十二月には完成の予定です。この素晴らしい学習環境を永く維持していくためには美化、整理整頓などの指導、環境やモノを大切にしている心の醸成も大切であり、ご家庭の協力とともに進めていきます。

私も教職員一同は、二十世紀の成蹊学園、中学・高等学校の次なる百年の発展のために「伝統とともに飛躍しよう」の意気込みでたゆまぬ努力を続けてまいりますので、卒業生の皆さま、在校生保護者の皆さまの倍旧のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



「少人数教育」を支える 環境づくり

成蹊小学校長

金納 善明 Yoshiaki Kinno

成 蹊学園のすべての新入生の皆さま、そして保護者の皆さま、ご入学おめでとうございます。「吾らの園」に集われた皆さまに、心よりお祝い申し上げます。

全学年が二十八人学級へ

小学校は、いよいよ「少人数教育」を支える環境づくりが完成する年を迎えました。

一つ目は二〇〇五年度から段階的に二十八人四学級に移行してきた学級編成の完成です。

この四月からは、一年生から六年生までの全学年が東西南北の四学級で編成されることになりました。小学校では、一つの学級にとどまることなく、学年内の子どもたちの交流を大切な教育機会ととらえています。その意味では、従来の三学級の交流に比べ四学級の交流はさらに密度を増すばかりでなく、経験豊かな四担任の個性がいつそう学年経営を充実させることになると期待しています。

さらにまた、発達年齢の違う異学年間の子どもたちの交流も、子どもたちの心の発達に欠かせない教育刺激となります。移行期には学級数が異なる学年間の交流にいろいろな調整が必要でした。しかし、今年からはすべての学年の学級数が揃うことになり、さまざまな行事のなかで子どもたちの「縦割り意識」を活発にする異学年間交流が容易になるものと期待しています。

もちろん形式を優先させるだけの機械的な縦割りの導入は好ましくありませんが、遠足・運動会・文化祭・音楽会など小学校の全校行事をはじめとしたさまざまな場で異学年間交流の充実を検討する素地ができたことを期待しているところです。

新校舎がいよいよ完成

二つ目は昨年五月から工事が進んできた新校舎の完成です。

これまでの本館教室棟や理科館、そして低学年の遊び場であったリトルグラウンドのすべてを敷地とした新教室棟が七月には竣工の運びとなりました。学園そして建設担当者のご協力によって工事現場の壁に用意された透明板から工事の進捗状況を眺めてきた子どもたちも、今では姿を見せてきた階段式三階建ての新校舎の景観を見上げるようになりました。

この七月までの一学期間、子どもたちはトンネル山グラウンドの仮設校舎で過ごしますが、二学期からはいよいよ新校舎での生活が始まります。例年六月に実施している全校授業参観日も、今年は特別に九月に設定して、多くの在校生保護者の皆さまに新しい校舎をご案内できるよう計画しております。

これまでの本館教室棟では四十名以上を一学級定員とした時代もありました。これに比べれば、新校舎の最大三十二名定員の教室は狭く感じられるかもしれません。しかしながら、教室と同じ広さの南面ベランダと四教室の廊下側に広がるワークスペースとが、学年発達に応じた多様な学習機会を保障するものと期待しています。

木の柔らかな感触を大切にしたい新校舎は、私ども小学校が待ち望んだ「少人数教育」の重要な環境基盤となることは間違いありません。

よりよい教育環境づくりのために

このように、小学校は学園創立一〇〇周年記念事業「新・成蹊創造プラン」における小学校「少人数教育」を支える環境が整う年を迎えたわけですが、これらの環境を生かす私ども教員の研究・実践に終わりはありません。子どもたちの新しい環境を生かす英知は、教員集団の結束の中にこそ生まれるものと心新たにしております。

二十一世紀の小学校の教育目標は「自立・連帯・創造」の子ども像として掲げています。そしてこの教育目標は、期待される子どもたちの姿であるばかりではなく、子どもたちの学習と生活を支える学校環境や教員集団の方向性、そして在校生保護者の皆さまの姿として「自立・連帯・創造」が具現化されることを心より願っています。

皆さまの小学校教育に対するご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。

